広報
アノロ
令和4年9月1日
第108号
栗山町開拓記念館

福井正之（ふくいまさゆき）のこと
―夕張の山高く・夕張の水長く

○はじめに

これまで「広報アノロ」のバックナンバーでは、「伝聞 泉麟太郎」「角田村草創期―開拓功労の人たち」のシリーズとして、泉麟太郎をはじめ、渡辺大介、杉武一郎、高木兼寛、湯地定基など栗山の開発期に地域の発展に尽力した所縁の人達を取り上げ、その人と功績などを紹介してきました。

このように、今日の栗山の基礎を形づくった先人達の中には、この地に数々の業績を残した人物を数多く挙げることができます。

今回紹介する福井正之も明治の頃、栗山の草創期に活躍をした、栗山地域の傑出した人物の一人でした。

ただ、福井を記録した人物像や功績を紹介する文献類で栗山に残るものは僅かなものに限られ、また、若くして没したため、栗山の歴史の中ではあまり知られることは多くありません。

福井の没後に刊行された『角田村開村三十周年写真帳』や『北海道発達史各村誌』などに簡単な事蹟の紹介が載せられてはいましたが、今回の「広報アノロ」では、栗山の人物誌として、泉麟太郎たちと栗山の農業開発に従事し、その実益を基に道内でも有数の経済人として活躍した福井正之を改めて取り上げることとしました。

福井の功績は大きく分けて、次のことを挙げることができます。

・夕張開墾起業組合と真成社の頃
―角田村の村政と公共事業への参加
・土功組合の頃
―農業基盤（用水事業）の確立と北海道米作功労者
・道内の政界、経済界での活躍
―倉庫・流通業から金融、運輸まで

○経歴

改めて福井正之の経歴をみると大正八年に刊行された『角田村開村三十周年写真帳』には、福井の経歴が顔写真とともに、次のような内容で簡単に記されています。

「君ハ文久二年（一八六二年）二月二十六日和歌山県那賀郡荒川村ニ生ル。明治二十六年中、和歌山県岩田村ヨリ十三戸へ移住開発ニ努メ、大農場経営成功本村ノ為盡シ、明治二十九年五月総代人ニ選バレ同年十月土功組合役員トナリ三十二年八月同副長トナル。三十一年総代人再選。同三十三年四月同上。三十五年六月二級村会議員当選。三十九年六月同上再選。四十年六月一級村会一級議員当選就職。同四十一年八月逝去。」

ここでは角田村への移住の年を明治二十六年としていますが、他の記録類から類推すると二十七年が正しいものと思われます。

また、北海道大学附属図書館の北方資料室には、明治期以降の栗山町の古写真が数多く保存されています。おもに札幌農学校当時の第五農場（雨煙別・北学田）と第六農場（阿野呂・南学田）関係のものが多いのですが、その中に福井正之に関係するものが納められていました。

○資料『北海道発達史各村誌』

さらに、福井の経歴や人物を記した資料で最も字数も多く内容の濃いものとして、明治四十四年に出版された『北海道発達史各村誌』があります。この記述については、あまり知られることの多くなかった、福井の人物像や家族、功績などを最も詳しく紹介したものとして、また、栗山町史の中での基礎資料としても初出のものであるため、今回、その関係する箇所の全文を紹介したいと思います。

（○は印刷状態が悪く判読不明の箇所）

「荊棘蓬生、老樹○天鬱蒼として天日を遮り足容るゝに處なかりし夕張大原野今や一望万頃（見渡す限りの広がり）の水田と化し、穣々（豊かに実る）の豊穀の品質之を北海有数と称せらるゝに至れるもの、実に我が福井正之氏が拮据（仕事に励むこと）経営の功に帰せずんばあらず、氏は文久三年某月某日を以て紀州那賀郡安楽村に生る、本姓は津川氏雄三郎氏の三男なり、母は同郡山崎村津村重兵衛氏の女也、氏出でゝ同郡岩手村福井吉左衛門氏に養はる、福井家は三百年来の豪家にて氏に至って実に二九（代）なりと云う、其の先は信州より出で武術修行の為め普ねく国中を周遊し常に紀州に土着す、高祖父文左衛門祖祖々父善吉氏等共に大庄屋たり、養父吉左衛門氏は区長戸長村長として常に地方の為めに尽瘁す、氏は夙に和歌山県庁に出仕し、後ち那賀郡々書記に転ず、明治二十五年中北海道の実情視察として渡道し、道庁にに就て諸般の調査を遂げ、更らに親しく各地を踏査して深く其実地を視して帰る、此の行大いに得る處有り断然志を決して本道に於て為す處あらんと期し明治二十七年官職を抛（なげう）ち単身渡道し角田村に入る、即ち角田村の元老泉麟太郎氏の真成社組合の耕地既墾未墾を併せて八十万坪（約二四六・五ヘクタール）を買収して農業に従事し、更に未開地の貸付及買収に依って耕地六百町歩（約五九五ヘクタール）に達す、此に於てか水田開発に志し資金五万円を投じて灌漑工事を起す五ヶ年にして完成し良田二百七十歩（約二アール）を得、実に明治二十九年の事なりき、今や其耕八百余町歩（約七九三ヘクタール）小作三百戸に達し、年収三万五千円を算するに至れり、而して此の成功を見るに至れる前後五年余の氏が苦辛惨憺頗る伝ふるに足るべきもの有り、且つや要する處の資金約十万余円は或は勧業銀行に或は商業銀行に、之を仰ぐ一に氏の至誠と熱心に因て目的を達し得たり、氏は実に其身心を捧げて夕張原野の水田を開発し、其の地をして今日の運盛に向はしめたる也、氏をして○すには天壽を以すれば其成功而して延いて国家に貢献する處多大なる可きに、惜しむ可きかな不幸病を得て復た遂に起たず、明治四十一年二月齢ひ漸く四十六歳にして長逝せられたるは、独り福井家の不幸たるのみならずして、実に本道農界の大損害なりと謂つ※ママ可き也。氏の室（妻）は福井家の長女にして富女と称し明治元年二月十五日生る、長男善吉氏を督励して乃父（父）の遺業を完ふせしむ○明治二十年三月十一日其郷里に生れ、二十八年中父君の移住に従ひて移り小学の教科を了えて後庁立札幌中学校に学び第三学年に進む、偶ま父君の喪に遭ひて半途廃学し家政の整理に任じ、飽く迄乃父の遺を保持し、其の半生の苦辛を空しふせざらん事を誓ひ、専念一意保守的態度を持し着々農場の改良に努む、故正之氏の遺子は、善吉氏の外、二男庄吉、三男正彦、長女ハナ子、二女アキ子、三女フサ子、四女正子、五女節子の三男五女にして、母君長兄愛護の下に修学しつゝ有り、故人は渾身の精力を注いで斯業に精励し常に改善進歩を企図せるも、一面又心を公事に注ぐ跋に熱烈にして、夙に村会議員として学務委員を兼ね、村治教育に貢献し、又用水土功組合会計の任に當りて、地方農家の利益を増進するの外角田尋常高等小学校に土地二反歩（約六百坪）を寄附せるを始め、資を公共事業に献げて賞杯を受くる事五十余個、褒状の数百余通に上ぼる以て其の赤心を見るべきなり、殊に日本赤十字に入っては疾くに終身社員に列せられ、尚武会員として事業を賛○し、日露の戦役に際しては国債に応ずること五千円、事の大小懸念を案じて最も有利に其の精神の存する處を表明して○○無きは、真に敬○す可き也。

嗚呼氏の如きは真に本道農界の模範的人物にして、亦実に恩人たるなり、不幸此人今や亡しと雖も其献身的事業は存して以て偉績を千載に語る可き也。」

ここでは没年を明治四十一年二月としていますが、八月二日が正しく、二日の二と八月を混同したものと思われます。

（裏面へ続く）

この資料では、福井が北海道へ移住する以前に和歌山の県庁職員や郡役場の書記をしていたことや、北海道の実情調査を道庁を通じて行っていたこと。その調査を基に角田村への入植が行われたことなどが、家族の構成などとともに詳しく記されています。

さらに北大附属図書館（北方資料室）に所蔵される内容のものとは異なる、福井の肖像写真の他に、住宅と家族、福井の石碑（完成直後の「頌徳碑」）、福井農場の写真などが載せられています。同書に掲載されている泉麟太郎の紹介以上に、記載される内容も多く、それ自体をすなわち福井の評価とは言いきれませんが、編集者の相応の評価を感じさせるものがあるようにも思えるところです。

○村政参加と実業家としての姿

福井は入植後の早い時期から総代など角田村の村政に参加し、「村会議員として学務委員を兼ね、村治教育に貢献」（『北海道発達史各村誌』）と、初期の教育環境の整備を担い、自らも角田尋常高等小学校に二反歩の土地を寄附するなど、地域の社会事象にも深く関わっていく姿勢がみえます。福井が没するまでの村政の足取りは次のとおりでした。

「角田村の総代人就任（※就任期日）」
・明治二十九年五月、
・明治三十一年五月（十一月辞任）
・明治三十二年四月
・明治三十三年四月
「二級町村当時の角田村村会議員就任」
・明治三十五年六月
・明治三十七年六月
・明治三十九年六月
「一級町村制当時の角田村村会議員就任」
・明治四〇年六月

残念ながら、この翌年八月には任期半ばで没し、福井の村政の貢献は途絶えています。

大農場の経営以外で、福井の経済人、実業家としての側面はあまり知られることはありませんが、角田村以外の地域での農地の取得など、今で言うM＆A（企業買収）の手法で拡張した実績がありました。倉庫業や金融面にも進出し、明治三十八年に㈱札幌貯蓄銀行の役員に就任。（北海道貯蓄銀行は　明治四十二年に㈱拓殖貯金銀行と変わり、大正十一年に北門銀行、昭和十四年に北海道拓殖銀行と合併）。

また、設立当初から参加した札幌石材馬車鉄道株式会社は明治四十二年に建築用石材を輸送する目的で山鼻～石切山に馬車鉄道（「馬鉄」）が敷設されました。明治四十五年には路線網を市街地まで拡張しています。

大正七年に札幌電気軌道として開業したのちに昭和二年に市営化され札幌市電として引き継がれています。

福井の没後となる、大正四年に経営基盤であった農場は、後継者の福井善吉から、千葉県印旛郡佐倉町の旧佐倉藩主で貴族院議員でもあった堀田正恒伯爵家に売却され、堀田（佐倉）農場となりました。

○福井農場から堀田農場へ

「堀田農場は元福井農場と称して、明治二十七年和歌山の素封家の後を継いだ福井正之が開村間もない本村に来村し、郡下の拓地殖民を志して、広大な地積の買収を企画したのにはじまる。当時開墾起業組合は解散に直面した折りであったので、福井は組合員の地所を買い、当時設立していた真成社にも出資して土地の権利を得るなど、巨費を投じて大農場の経営を図った。このため村の開発はいちじるしく促進され、また金融上にも少なからぬ潤沢さを与えるなど、町に寄与した事蹟は大なるものがあった。しかも福井は入地当時三十三歳の若さであって、十三戸（共和）に草小屋を建て、自らこの大事業を起し、泉の最も強い協力補佐者となって水田開発の大計画を達成させ、本町開拓の偉大な貢献者であり指導者でもあった。不幸にも明治四十一年八月、四十七歳で病を得て逝去した。福井が後年まで生存して町政に奔走していたならば、本町はますます顕著な発展を見せたであろうと関係者から惜しまれていた。当時総反別七七〇余町歩（約七六四ヘクタール）を有したが、大正四年四月に福井善吉は家政の都合により、千葉県旧佐倉藩主堀田伯爵の買収に応じたので堀田の所有農場となった。」

（『栗山町史』昭和四十六年）

○夕張の山高く・夕張の水長く

角田にある古刹、浄土宗方田寺の境内に一基の記念碑が建っています。福井が没した一年後に建之されたものですが、題額には「山高水長」と記された文字が刻まれ、三角形をした特徴的な石碑です。

明治四十二年建立の碑は北学田、南学田にある「成墾記念碑」と同年のもので、町内の石碑としても古い碑の一つでした。碑文は当時東北帝国大学農科大学学長であった佐藤昌介の撰文となり、佐藤と福井がどのような関係があったのかは調べ切れてはいませんが、札幌農学校の第五学田（雨煙別・北学田）、第六学田（阿野呂・南学田）開発当時と福井の角田村での開発時期とも重なり、何かしらの親交があったとしても不思議ではありません。「山高水長」。実に故人を顕彰する言葉としてふさわしいものがあります。碑文は漢文体なので読み下すと次の内容となります。

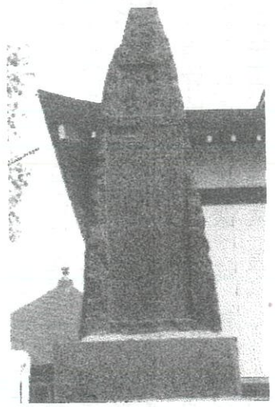
「福井正之頌徳碑」（角田方田寺境内）
「山高水長」（碑文訳）
福井正之君碑銘

農学博士　佐藤昌介※撰文并題額

君諱は正之、姓は福井氏、津田雄三郎の三子なり。文久二年二月二十六日紀伊阿（安）楽川邑（むら：現和歌山県那賀郡安楽川町）に生る。二十四根来の人、福井吉左衛門養うて子と為す。その先（祖）は日野氏にして郷の名族として世々藩公の知遇を受く。明治となり二十七年八月、君北海道に来り夕張原野を相して地を拓き民を植し遂に角田村に移住す。角田、長沼、由仁の三村に於て熟田千町を紘き、戸二百余、権益毎歳三万余円を上げ得たり云く。本道を益するは、多く田地を有する者固より少なしと為さず、其の実収の多く矢ぬる未だ君の如きもの有らず。成功の最大なる者と謂うべきなり。君の性温良にして才幹（能力と手腕）あり。夙に心を国事に尽し、その角田に移住するや公を常に率先して、力を公共の事に致し、教育勧業より土木衛生に至るみな関与せざるなし。頗る功績有り一郷其徳を称う。人と交わりて至誠回わずして咸その義に服す。明治四十一年八月二日病歿す年四十六。福井氏に配するは則吉左衛門の女なり三男五女を挙ぐ、長子善吉後を承け家道益々昌なり。今茲に知友及びかって恩を受けし者相謀りて碑を建て、追慕の意を表し余に文を徴す。乃ちその梗概を〇し糸にして鑽を以てす。頌に曰く　志経世に存し　寸適済す時　年寿天慳　徳義人思い　夕張山高く　功業顕れ不なり　夕張の水長く　名声遠く　馳せ　余塵本有り　遺愛涯無し　勤みて以て後を諗い　斯の豊碑を視る

明治四十二年七月下澣南海老生湘香新居敦書（未完）

次回の「福井正之（二）」では、明治期の新聞に紹介されていた福井正之の活動について、亡くなるまでの内容を時系列に拾い出して、詳しく紹介したいと思います。



「山高水長」碑
明治42年（1909年）

○栗山町開拓記念館の企画

【八月五日㈮～九月一八日㈰まで継続中】
・第二回企画展「空旅・くりやま」
―栗山の史跡を空から巡る
映像展＋ワークショップ
※十月からは第三回企画展「屋号・印章から眺める栗山の商業」展を予定しています。

【十月一日㈯～十一月十八日㈮】
〇新収資料（六月～七月）
・「国道二八号線改良工事概要」・「角田神社青焼図面」・「北大第五農場実測図」・「菅笠」・「北海道物新書」などの寄贈をいただきました。

栗山町開拓記念館では栗山の歴史や産業・文化に関係する地域の資・史料を収集しています。何かお気づきのものなどがあればご連絡ください。

栗山町開拓記念館　研究員　青木　隆夫
栗　山　町　教　育　委　員　会　発　行